

歳神さまとお飾り

平成12年3月31日発行

狛江市和泉本町1-1-5

電話 (3430) 1111

I 歳神さま

歳（年）神さまは、正月に家々にやってくる神様で、ところによって、正月さま・歳徳さん・若年さん・年爺さん・年どんなどともよばれています。狛江では、他の多摩地域や区部などと同様に、トシガミサマのよび名で伝えられてきました。

「お正月の神さんは、トシガミサマとってました。伊豆美神社の神主さんに、毎年、歳神さまの幣束を剪ってもらうんです。年の暮れになると、オカマジメとって家じゅうの神様の数だけ幣束などをお宮からもらうんですが、ふだんはまつてない歳神さまの幣束も入っているんです。歳神さまは、お正月だけおまつりする、お正月の一番だいじな神様ですよ。だから、歳神さまが来されなければ、新年にはならないわけ。」（駒井町 明治32年生 男性）

歳神とは、どのような神格をもつ神なのでしょう。その本体は、かならずしもあきらかではありませんが、各地にのこる習俗などから、祖霊、すなわち先祖の霊に通ずるものと、田の神・農神のもつ性格とを、そなえている神とみられています。トシということばは、もとは稲の実りをさし、それから米作周期の1年を意味するようになったもので、トシの神は米作りの神として考えられていたようです。

狛江のなかでは、歳神さまについて、どのように言い伝えられてきたのでしょうか。その家の先祖が歳神さまになって、お正月にやってくるのだと聞いているという人もあり、それは、お盆のお精霊さまより、もっと遠い先祖だということです。また、お正月の神様の歳神さまは、その1年を守ってくださるためにやってくる神様だといわれます。その年の穀物の豊かな実りを約束し、一家のしあわせを守ってくれるので、いい年になるように、歳神さまにお願いするのだといえます。そして、歳神さまは、高砂の翁のような年取った男の神様だという人、女の神様ではないかと伝える人もありました。

歳神さまについての言い伝えのなかで、狛江でよく聞かれるのは、「歳神さまは、卯の日に上がる」「卯の日に帰られる」というものです。「卯の日、卯の刻に帰られる」ともいわれています。卯の日は、十二支の4番目の卯にあたる日。ここでは、正月の初卯の日をさします。卯の刻は、今の午前6時ごろ。また、「歳神さまは、卯の日が嫌いなので、卯の日がまわって来ないうちに片づけないといけない」と、父親から言われていたという人もあります。卯の日が三カ日の間にめぐってきた年には、三カ日のうちでも神様をお下げしたということもあったようです。「卯の日に歳神さまが上がる」というところは少なく、多摩の各地でも同じような伝承がみられます。先にあげた「歳神さまは卯の日が嫌いなので」と話す人は、また、「歳神さまが嫌うので、暮れの餅つきも卯の日だけは除いた」といっています。歳神さまは卯の日におさがりになるので、この日に餅つきをしないというところもありました（日野市）。

正月の神様を迎えるために、「歳神さまの棚」を設ける風習がありました。「歳神棚」ともよばれるもので、家によっては、この神棚を「歳神さま」とよんでいます。棚の上に、輪切りにした大根とか、わらを束ねたものなどを御座にして幣束を立て、オスワリ（お供え）、お明かり、お神酒などを供えます。いまでは、歳神さまの棚をつくらず、大神宮の神棚と一緒にまつるのが、おおかたの家で行われている歳神のまつり方ですが、昭和の初めころまでは、歳神棚を設ける家も少なくなかったようです。

歳神さまは、「エホウ（恵方）からやってくる」「アキノカタ（明きの方）から来される」などといい、暦をみて新しい年の恵方を調べ、恵方に向けて棚を設けたものでした。歳神棚には、次のような形がみられます。

- ① ザシキの恵方にあたる隅の、長押とか敷居などの上に、三角形に切った板（多くは杉材、檜板も使用）をのせたもの。その年の恵方によって場所が変わりましたが、しだいに固定したり、また、家の作りによっては、年々の恵方の棚をつくる場所がないこともあって、神棚の隣に設けたりする家もありました。

② 吊り棚の形になっているもので、その棚には杉とか檜とかの厚めの板や、竹やカツノキなどの割り木を簀の子状に編んだものが使われていました。棚は新しく編んだ縄で天井から恵方に向けて吊るし、歳神の幣束、お供え、お神酒、お明かりをあげます。2枚の杉板を4本の柱で組み立てて作った歳神棚を、吊るす家もありました。いくつかの事例をあげてみましょう。

- ・ 歳神さまの棚は、きまったものがあって、毎年、それを使ったものでした。昔の家は天井といっても、きちんとなっていないし、ヌキでもってスカシワリになっているので、吊るにも、どうにでもなったんです。歳神さまの棚には、八丁注連（八つのシデをつけた注連縄）をさげました。（岩戸北 M家）
- ・ 割り竹やカツノキを簀の子のように編んで、それを縄で吊るしてあるのを、子どものころ（大正末）みたのを覚えています。（東野川 K家）

③ 簀の子状につくった歳神さまの棚を、大神宮の神棚の一角にのせてまつる。この歳神棚は、かつては②と同様に吊るしたものと思われます。この棚も、近年までは見られましたが、代がわりなどをきっかけに、いまでは、ほとんど見ることはできません。

④ 床の間に歳神さまをまつる。棚をつくらずに、お膳を据えて、幣束、お供えなどをのせ、お飾りを立てかけます。いまも行われている歳神さまのまつり方の一つ。

⑤ 神棚の下などに4斗椽を伏せて、その上に台をのせ、お供えは一番大きいものを供えて、これを歳神棚としていた家もありました。明治の末ごろのことです。

以上のように、歳神さまのまつり方は、家によってさまざまですが、代がわりや生活様式、家の構造の変化などとともに、いまでは、特別に歳神棚をつくることもまれになりました。それでも、お正月には、歳神さまを大神宮の神棚にまつる家は少なくありません。

II お飾り

多くの農家で水田を作っていたころには、12月30日近くになると、家々で男たちが、正月に迎える歳神さまや家じゅうの神々をまつるために、注連縄作りをしたものです。これは、その家の主人の仕事とされていました。

注連縄には、ふつうの縄とちがって打たないままのキワラ（生葉）を使い、また、家によっては、常とはちがう左編みにしました。注連縄にもいくつかの種類があり、家ごとに作り方や形、使い方にも違いがありますが、ダイコ（大根）ジメ、ゴボウジメ、シメカザリ、マタジメ、ワジメなどと、まつる神や場所によって作り分けられています。輪注連は輪飾りともよび、屋敷の入口や、トンボグチとか勝手口などに飾ったり、土蔵や納屋、井戸、便所の入口にかけたりします。正月の注連縄は、本来、歳神を迎える場所に張りめぐらすものであったのが、簡略化されて、輪飾りなどのかたちになったものと考えられています。

お飾りは、一夜飾りはいけないとされていたので、30日までにまにあわないときには、元日の早朝にお飾りをするものでした。お飾りなどは、7日の風にあてるものではないといって、7日の早朝までには下げる家も少なくありません。

（狛江市文化財専門委員 中島恵子）



神棚にまつた歳神さま（昭和55年）



座敷の隅にまつた歳神さま（昭和55年）